

同人誌（2017年9月号）

風 狂

風 狂 会

詩

空腹感	なべくらますみ
季節のスケッチ	北岡 善寿
詩人（方言詩）	原 詩夏至
モナリザ	長尾 雅樹
友よサヨーナラ	神宮 清志
日傘	高 裕香
丸岡城	出雲 筑三
共和国の始まり	高村 昌憲

風狂ギャラリー

三浦逸雄の世界（二十二）	三浦 逸雄
--------------	-------

エッセイ

酔狂洋酒談義（一）	神宮 清志
-----------	-------

翻訳

アラン『大戦の思い出』（四）	高村 昌憲 訳
----------------	---------

執筆者のプロフィール

読者からのコメント（2017年8月号）

ひりついた喉に一滴の水もなく
手にするパンの一欠片もない
空腹に苛まれる子の腹は異常に膨らんでいる
やせ細った腕 脛
写し出された情景
この子たちは この日食べたものがあつたのか

イベント会場では
昼休みになっても弁当屋が出なかった
近場にはコンビニもなく
休憩時間二十分では
駅まで行って蕎麦を食べて来るのも難しく
腹を撫でて我慢した

終了後
思わぬ人と出会い
お茶でも と誘われコーヒーをご馳走になった
空腹感が収まったように感じた
これで次の予定会場へ行かれる
と安心もした

会場へ到着するなり講演は始まった
一息つく間もなく二時間の聴講
途中十分の休憩はあつても
自動販売機はなく
乾いた喉が痛い

水を飲みたかった
おにぎりを食べたかった
昼の空腹感は夕食を食べても収まらず
翌日の朝食を食べるまで続いた

ああ でもあの子供たちは
もっと辛い思いを
しているに違いない

季節には決まって訪ねる合流点近くの
罔屋の爺さんは何故か今年は独り
水槽のある屋根を掛けた入口の前で
古い木の椅子に黙然と座っている。
去年までは婆さんもいたし、人懐こい
大きな茶色の犬もいた。その姿が
何処にも見えない。

もともと罔を売り買いするだけの
赤の他人同士。かつてそこにいた者
の不在の訳を訊くのは避けて、代りに
今年は海からの魚の遡上が少ない
そうじゃないかと言ってやった。
爺さんは立ち上がって皮だけ張り付いた
染みのある顔に口を尖らせて色をなした。
—とんでもない！そんな情報は出鱈目だよ、
魚が海から上がっていないわけがない。
爺さんは天然遡上を固く信じている顔。
こちらは尚も疑ったが何せ他所者。
罔を一匹買って修善寺橋の上の瀬に
竿を出した。やっぱり魚影は薄く
石にナメ跡が少ない。
—みんな朝早くから来ていて、ちっとも
釣れていませんよ。

偏光眼鏡を掛けた若い釣師が声をかけて
通り過ぎて行く。驚くべき我慢強さで
人影が幾つも川に立っている。こちらは
気紛れに動いて何匹か釣って川を上がった。
罔屋の草の茂った広い残照の庭の独活が二本
高く伸びている片隅に戻ると爺さんは横向き
の姿勢で椅子に座って眼鏡も掛けずに婆さん
が針の穴に糸を通すような頼りない手つきで
仕掛けらしいものを作っている。どうしてか
西日の当たった横顔の爺さんの日除けの帽子が
形の崩れた古いシルクハットに見えた。

なんや
和歌山の詩人
Aさんは
ムカデ嫌いで
嫌いで
大嫌いで——

今では
ムカデを
箱に入れて
毎日
「うわ！ 　いつ見ても脚が仰山！」とか
「あっ！ 　脱皮しいやった！
　なっとうしいやる！」とか
ひしりもて
暮らしているんやて。

ほんま
これやから
Aさんは
詩人なんや。

「へえー、そら凄いわ。
　僕、無理やて。
　例え
　あの　茶色い手エみみたいな
　アシダカグモ。
　僕　あれ
　大嫌いなんやけど
　それを　わざわざ
　飼うやて
　そんなもん……」

呆れた僕が
　そう言いかけると——

「ああ、あれかあ。
あれは、スリッパで
ぼーんと叩いたら
それで仕舞いやで」

ほんま
これやよって
詩人は困るんや。

* なっとうしいやる！...なぜそんなことを！（和歌山方言）
ひしる...（助けを求めて）叫ぶ（和歌山方言）

（和歌山方言については、
秋野かよ子さんのご指導を頂きました。
どうもありがとうございました。）

淑やかな凶像を破り捨てた
茶髪の女が構えている
背景に黒い川の水が流れて
赤い花の群れが描き出される
目はお道化て二つ見開らかれて
鼻は茶色になぞられながら
口は閉じられて薄く白い色が浮いている
黒い衣服は肩から滑るように包まれて
胸は開けて肌が覗いている
美人の面影は永遠の謎を隠して
モナリザは泣いたりしないが
潤んだ目差しの視線の彼方に
歴史の棘が時代の夢を串刺しにする
「あらあら私って誰かしら」
「君は秘密の鏡に写った狸の抜け殻さ」
獣の印象を素早く画面に認めて
モナリザはルーヴルの面影を消して
畢生の美女の写像が荒々しく転写されて行く
凶像は転生された
不思議の魅惑に翻弄された狸の素顔
謎の笑みは消えたが
確かに不在のモナリザが検索されて
美の極点は拡散された飼育の洗礼
育てられた花紋の概念は野性の感覚
茶髪の女は時間の変遷に暴威を受けて
変身の術を如実に示そうとする
モナリザはもう一つの現実を生きる
錯綜した引っ掻き傷の集積から
写し出された美女の面影が転倒されて
紛れもない新生の顔貌が陽画を繙いて行く

(ジャン＝ミシェル・バスキアの画より)

ある朝庭に出てみると
シマヘビが首を食いちぎられて丸くなっていた
最後のあがきの血が地面に広がっていた

近所の猫にやられたのだ
このシマは庭の深い草むらに棲みついていた
あるいは何代もここで生きていたのかもしれない

思えば娘がまだ幼なかつたころ
シマを相手に遊んでいた
ある時近所へシマを連れて遊びに行った

夕闇迫るころその家の人血相を変えて飛んできた
お宅の子が家へ蛇を置いていった
さっそく探しに行くとすでにどこかへ遁走していた

幾日か経ったら草むらに戻っていた
「おかえり」と挨拶したわけでもないが
どことなく嬉しかった

ある朝うちの前で騒ぎ声がした
出てみるとシマが道路に出ていた
サラリーマンが怖がって通れない

こんな所へ出て来るんじゃない
戻るように足で合図すると
シマは駐車場をすするすと抜けて垣根に昇った

恨むような拗ねるような目つきでこちらを見ていた
あの頃はお互い平穏にして健やかだった
それにしてもなんという無慚な最期だろう

枯草をいっぱい詰めて
棲んでいた庭の一隅に埋めた
なにも祈ることもなく

毎年 夏の始まりに必ず買い求める。
今年も2本も買ったのに
やっぱり 夏の終わりと共に失くしてしまった。

刺すように暑い日差しを最強に防ぐ黒の日傘
パープルと白のストライプ模様
どちらも 私にはお洒落過ぎる

肩にのせ くるくるくると 回しながら
軽やかに 爽やかに 夢心地
少しお澄まししながら歩いたね。

いつもそばにいて
私の身体を守ってくれたのに
あなたのことがわからなくてごめんなさい。

ついに日本最古なり 天守閣
誰も試みなかつた[※]笏谷石の屋根瓦
五風十雨に耐えた越前の名将柴田

城は小さいがえらく重い
円筒瓦は整列した竹筒のようだ
重厚な柱は今なお信念を刻み続ける

望楼型天守は日本海まで睨んでいく
寺という名の城郭を攻略せよ
人心を操るのはこれまでとせよ

野面積み石垣は排水こそ良いが脆い
その弱点をカバーした凹み積み
信長にみる進取に富む土木設計者魂

宗教勢力との戦いに屈しなかった男
念仏を唱えているのは罪ではない
農民の苦しみを利用するな

一筆啓上 火の用心
お仙泣かすな馬肥やせ
軽妙なことばと裏腹な魔王の冷徹

※ 笏谷石(しゃくだにいし) 福井県・足羽山産出の凝灰岩・六千枚の石瓦を使用して築城

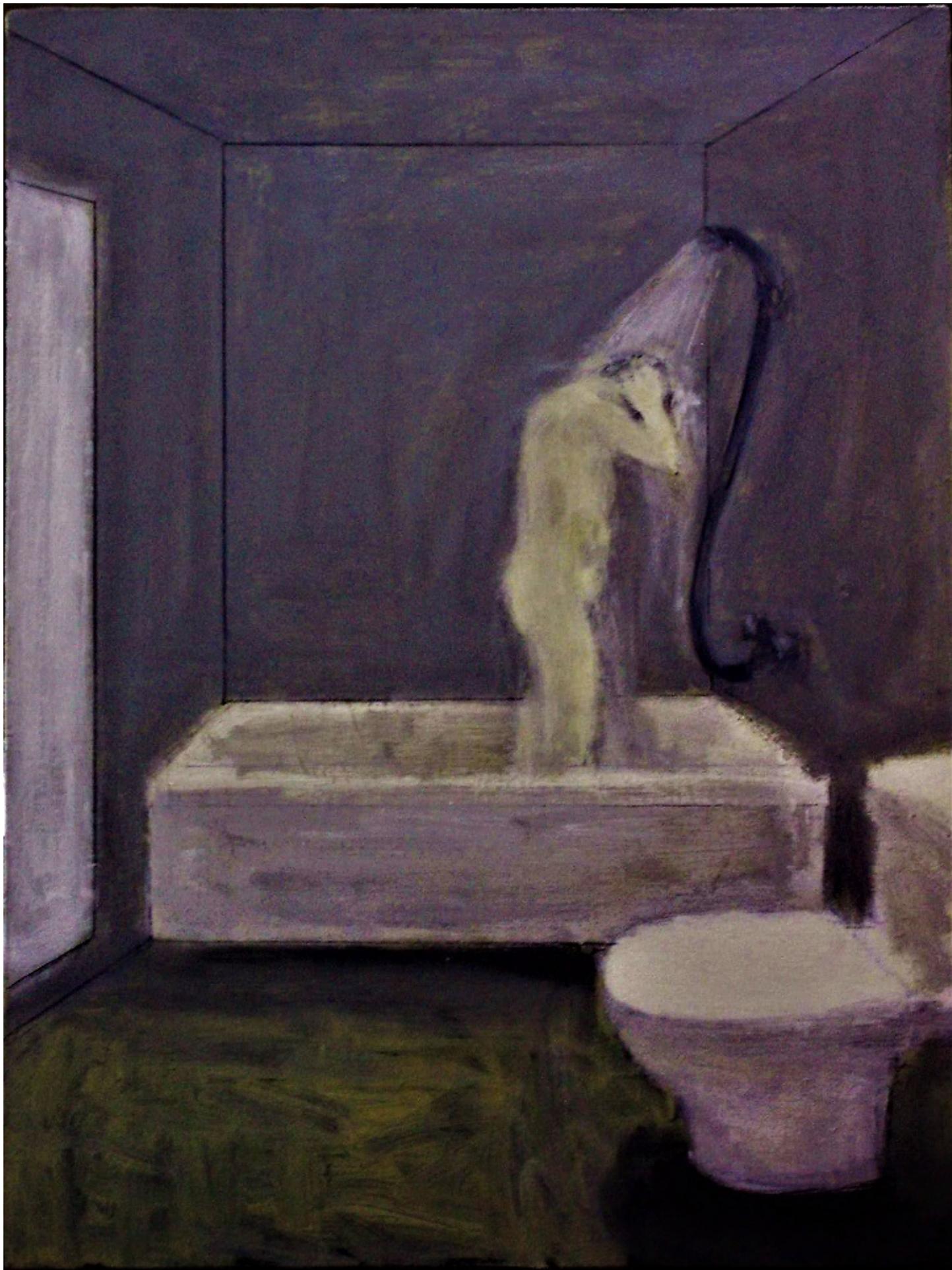
絶対的な権力者がいる処から
共和国の種が生まれると言う
全体主義の形式的な精神から
自由な思想の種が育つと言う

これらの光景は矛盾だらけだ
セザンヌの静物画を観る様に
これらの音響は飛躍だらけだ
バッハの無伴奏曲を聴く様に

最初は仕方なく集まる人々も
私が私自身であった様に選ぶ
最初は腕があり好きな仕事も
恐るべき権力には従順に転ぶ

もしも恵まれた気候の中なら
専制政治の種が生まれるのだ
もしも人間に影響する嵐なら
自由な心が共和国を生むのだ

落日は難解な風景に違いない
思考する人とは現在の否定だ
今は自由を離してはならない
思想と精神には時間が必要だ



三浦 逸雄 「躰を洗う男」 15号（麻布 油彩）

ビールとウイスキー

日本人にとって馴染の深い洋酒といえば、ビールとウイスキーであろうか。特にビールは日本の蒸し暑い気候と相まって、なくてはならない飲み物である。まずビールを飲んで、それから日本酒とか焼酎に移行するといった飲み方が一般的である。何はともあれビールで乾杯となる。結婚式の披露宴でも当然のごとくビールがテーブルに並ぶ。ところがこれに大方の欧米人が首を傾げる。彼らからするとビールは労働者の飲み物であって、汗にまみれた肉体を想起させる。とても結婚披露宴のような正餐に出てくるものではないのだ。あまり品のいい飲み物ではないということになる。こうしたときにはシャンパンとワインというのが欧米人の習慣なのである。

イギリスには「エール」というビールがある。あまり日本ではお目にかからないが、サマーセット・モームの小説などに出てくるので、文学好きには何やら愛着があるのではないか。ビールとエールはどこが違うかといえば、アルコール度数がビールは四%、エールは八%である。濃い焦げ茶色でコクのある味、フルーティである。ビールより高級と見られ、中流階級以上に好まれる傾向にある。

ビールの本場はドイツであり、彼らのビール好きは日本人以上かもしれない。彼らに言わせると日本人はビールを冷やし過ぎるという。冷やし過ぎてはビールの本当の味は判らないと主張する。しかし生ぬるいビールというのは日本人の好まざるところであろう。日本人にとってビールは暑い時に飲む清涼飲料水でもあるのだ。グーっと冷たいビールを飲み干すのが醍醐味、という気持ちは皆同じだろう。この感覚の違いは寒い国と蒸し暑い国の違い、と考えるのが妥当であろうと思う。

ビールの生産は日本では古くから盛んであり、旨いビールも多い。最近ではアジアを旅行すると、何処にもビールがあり、けっこう旨いものが多い。中国・ベトナムなどのビールは輸入されているから、好まれているのだろう。蒸し暑い東南アジアでは、どこでも愛飲されるので、西欧の習慣・文化に捉われることなく、ビール愛好が一つの文化として定着しつつあるようだ。

さてウイスキーについては、あまり高級な酒ではないという見方が欧州では根強い。チャーチルのおじいさんの頃は、ウイスキーは焼酎と変わらない程度の扱いだっただ。年代が経って樽の中での熟成が進んでくると、それなりの味になったので、しだいに格が上がってきたのだ。スカッチウイスキーといえば今では定評があり、銘柄もいろいろある。オールドパー、キングオブキングス、ジョニーウォーカー、ヴァランタイン、ホワイトホース、シーバスリーガル等々。

イギリス人はウイスキーを飲むとき水割りで飲む人が多い。水で割らなければ味が分からないという人も居る。ハイボールというのはウイスキーを水、ソーダ、ジンジャエール、コカ・コーラで割ったものである。スカッチウイスキーは必ず水またはソーダで割ることになっており、ジンジャエール、コカ・コーラで割るのは、アメリカのウイスキーである。

ことほど左様にアメリカのウイスキーは味が落ちる。歴史の古い国、それも高い文化を築いてきた国にしかいい酒はない。フランスをはじめとするヨーロッパ諸国、そして中国・日本には世界に誇れる酒がある。新興国家のアメリカにはそれがない。スカッチウイスキーなら水で割るとこ

ろを、アメリカのウイスキーはジンジャエールとかコカ・コーラで割ることにならざるを得ないのだ。

アメリカのウイスキーといえば、ケンタッキー・バーボンに代表され、アーリータイムズ、IWハーパー、ジムビーム、ワイルドターキー他銘柄は多い。ほかにテネシー・ウイスキーがあり、ジャックダニエルという銘柄が知られている。これらはトウモロコシを主材料としている。ライ麦を主材料としているのがカナダのウイスキーで、シーグラムスVO、カナディアン・クラブなどの銘柄が有名である。これらはアメリカ系のウイスキーとしてほぼ同質と見られ、西部開拓時代ほどの粗悪品は淘汰されつつあるものの、スカッチウイスキーにはまだ相当な距離がある。

しかし日本ではものによってはかなり高価だし、得意になって飲む人も少なくない。しかしあえて言わせていただけるなら、アメリカのウイスキーは低級品であって、荒くれ男が喉の奥に放り込むようにして飲むというイメージが強い。その傍らにはあまり上品とは言えないご婦人が寄り添い、甘い味を付けたカクテルを飲んでいるというのが、典型的なアメリカの風景である。上等な酒の出来ないアメリカでは、なにかと混ぜ合わせて飲む「カクテル」というものが大発展した。酒をなにかと混ぜて飲むのは古代からある。しかし氷を入れて甘い味を付けて、色もよし、香りもよしというカクテルを創り出したのはアメリカ人なのだ。ご婦人に酒を飲んでもらうには、口当たりのいい甘い味にすることが必要だったという事情も大きい。

しかしヨーロッパの由緒あるリキュールをカクテルの材料にするというのは、ある意味その酒に対して失礼ではないかと思う。さらには伝統文化に対する冒涇にさえなりかねない。本来カクテルなど酒の飲み方としては邪道なのだ。なのに戦後の日本ではカクテルというと、何やら高級で粋な飲み物という認識が定着してしまっている感が深い。日本には伝統ある銘酒があるのだから、アメリカのウイスキーとかカクテルにうつつを抜かすのは、そろそろ卒業してもいいのではないかと思う。

葡萄がいちばん

という次第でビールとウイスキーは一流の酒ではないということである。それでは何が一流かといえば、ワインとブランデーということになる。そもそもアルコールとして最も優れているのは、葡萄からとったアルコールであるということになっているのである。

シャンパンも葡萄から造られた醸造酒であり、欧米での乾杯はもっぱらシャンパンによる。フランスのシャンパーニュで造られたもののみ、シャンパンという刻印を壇のコルクに押すことが許されている。この酒はルイ十四世華やかな頃にベネディクト派の僧侶によって創られた。あるとき発酵の不完全な若い葡萄酒にコルク栓をしておいたところ、それが再発酵して泡を吹く酒になったのがきっかけと伝えられている。今でもこの方法によってシャンパンは造られており、一瓶ずつ造るから高価になる。これを大きな樽で造ったり、ひどいものになると後から炭酸水を加えて造るような粗悪品もある。この酒は横にして置くこと、そしてよく冷やして飲むこと、しかしグラスに氷を入れてはならないことになっている。

ワインは今や世界各地で造られており、銘柄の数は計り知れないほど多い。中でもフランスのボルドー、ドイツのライン地方など、定評のあるところである。もうひとつイタリアを忘れてはならない。日本では馴染みが少ないけれど百以上の銘柄があり、いずれもフランスワインと肩を並べている。

ワインには赤と白があり、赤は肉料理に、白は魚料理にいとされている。この辺は日本でも周知されてきた。赤と白の中間のロゼというのがあり、これはそれほど上等とされていないが、庶民的でさっぱりしていて飲みやすい。今や日本には世界各国のワインが輸入されており、国産ワインを含めてそれぞれに悪くない。むしろ古酒でとてつもなく高いワインが、ひどい癖があって飲みにくかったりする。高級店に行ってそうしたワインに辟易するという経験が誰にもあると思う。

イタリアはトスカーナ地方の特産で「キャンチワイン」というワインがある。胴の膨らんだ瓶に萱または麦で編んだ苞（つと）で巻いたデザインが素朴でいい。すこぶる飲みやすい庶民的な味で、赤八対白二の割合で混ぜてある。色・ブーケともに董のようなので、「董のような酒」と称される。それほど高くないし、珍しい形の瓶、飲みやすい味わい、もう少し親しんでもいいのではないかと思う。訪問するときの手土産に持参したことが何度かある。

ワインが葡萄から醸された醸造酒なら、ブランデーは葡萄から造られた蒸留酒で樽の中で熟成されたものである。ブランデーは“オー・ド・ヴィ”「生命の水」と称されるほどにフランス人は珍重する。中でもコニャック地方で造られるブランデーは特上とされている。コニャックとブランデーは別の酒と思っている向きもあるけれど、コニャックというところで造られたブランデーを総称していて、ヘネシーとかマルテルというのは銘柄名、つまり会社名である。コニャックにはVSOPのように英語の等級表示がつけてある。英語嫌いのフランス人には相応しくないとおっしゃるのは尤もなこと、じつはその初期においてはもっぱらアメリカ向けの輸出用だったのだ。アメリカ人が好んだところから、こうした等級表示がつけられたのである。

ブランデーを飲むときはブランデーグラスという独特のグラスに一オンス注ぐ。薄いガラスが丸く膨らんだグラスの底の方に琥珀色のブランデー、それを掌で包むように持つ。ひとときもすると体温が伝わってその芳香が狭くなったグラスの口から立ち上ってくる。やおらグラスを傾けて、ゆっくりと舌の上に乗せて味わうのである。一緒に摂るのはチーズがお勧めである。これは食前に飲む酒ではない。夜も深くなりゆく頃合い、揺り椅子にでも身を任せ、ステレオ・セットから流れてくる室内楽など聴きながら、といった演出が相応しい。人生の生きる意味を感じ、来し方行く末に思いを馳せるのも悪くないだろう。「月下独酌」の故事もあり、ほんとうにいい酒なら独酌にこそ深い味わいがある。

小説で有名になった酒

『宝島』というスティーブソンの小説のなかで、海賊たちが愛飲していたのは「ラム酒」だった。イギリス海軍が士気を鼓舞するためにラムを配布していたという話がある。海の男の酒というイメージが強い。ラムは糖蜜を醸造し蒸留して作られた酒である。カリブ海諸国が原産であり、いまなお多くそこで造られている。ウィリアム・スタブスという英語の教師が宴会に出るとき必ずラムを一瓶持参してきたものだ。彼は元海軍の軍人だったのかもしれない。運動会とか卒業式で校旗を掲揚する時、背筋をピンと伸ばして校旗を仰ぐ姿勢が堂に入っていたのを思い出す。ラム酒をいかにも旨そうに飲んでいるので、一杯飲ましてよと頼むと「おお、話せるね！」と喜んでグラスに注いでくれた。「マイヤーズ」「バカルディ」ほかの銘柄に定評がある。ラムはキューバが代表的だけれど、悪い酒ではない。それどころかアメリカンウイスキーより上等であると確信する。高価でもないし、一度飲んでみていただきたいと願う。

レマルクの小説で『凱旋門』という作品があり、映画化されてイングリッド・バーグマン、シャルル・ボアイエという顔合わせで、終戦直後に上映されて大ヒットした。第二次世界大戦直後の高揚した人々に、命懸けの恋が熱狂的に受け入れられた。その中で「カルヴァドス」という酒を主人公が飲んでいて、男たちに強い憧れを抱かせた。カルヴァドスという名前がいいし、シャルル・ボアイエがあまりにカッコよかった。カルヴァドスと聞くとなんとなく高級で粋な酒と思われるがちである。しかしこれは焼酎に匹敵する安酒なのだ。

『凱旋門』の主人公は亡命者で稼ぎのない男なのだから、そんなにいい酒を飲めるわけがない。実はカルヴァドスはリンゴから造られた蒸留酒である。醸造酒はシードルといい、どちらもノルマンディー地方の地酒である。最近フランスを旅行する人でノルマンディー地方の「モンサンミッシェル」という観光地が人気である。その近くではレストランでも飲めるので、飲んだ人も多いことだろう。このごく低級と思われるカルヴァドスが、アメリカでは「アップルジャック」と呼ばれて、高価な酒として流通し愛飲されている。ヨーロッパとアメリカとの水準の差を端的に示しているように思える。と、アメリカを見下したようなことを言っている場合ではない。日本で売られているカルヴァドスは、けっこういい値段なのだ。日本人のもっているカルヴァドスへの憧れと、その無知に付け込まれているとしか思えない。

ジンといえばイギリスのゴードンが有名だが、じつは本場はオランダで、ジェネヴァと呼ばれてオランダの誇りのひとつである。杜松の実を発酵液に入れて一緒に発酵させ、それを蒸留して造られる。これが万病の薬になると古くから信じられてきた。やがてイギリスに渡ってジンといわれ、辛口をドライジン、甘口をトムジンと呼ばれるようになった。日本ではジンをストレートで飲む人はほとんど居ない。ジンフィズというカクテルにして飲むのが普通である。これはジンにレモンジュースと甘味料を加え、氷を入れたシェーカーでよく振って、グラスに入れてから炭酸水を入れたものである。氷を浮かべ、レモンの一片を添えたりする。フィズ、サワー、コリンズというのは皆この作り方でベースになる蒸留酒は様々である。ドライジンならジンフィズだが、トムジンならトムコリンズとなる。ジンは味がごくプレーンなので、カクテルのベースに多用される。ジンの入らないカクテルはないと言われるほどに多い。ジンにリキュールを加えたものが全体の八〇%くらいになるのではないかと思う。(つづく)

第三章

私は、ここで重要な諸問題に触れます。私はそれらの問題を決して探求しませんでした。私を見付けに来たのであり、態度を決めなければなりません。私はこれ以上待つこと無く、従軍司祭を懲らしめたいと思っています。それでもお分かりになるでしょうが、彼らは全てを失うことはないでしょう。それからずっと後の一九一六年に、私は我らの戦争によって戦火となった最前線のフリレイにいました。私は火薬の様に活発な若者の班の絶対的な班長でした。或る夜に私の部署に這入って来た師団付き司祭は、葉巻と巻き煙草を持って来て、私立学校教授を職業としているアレルと名乗りました。彼が、私の軍隊の階級と学歴を大変に尊敬していたことを私は次に知りました。その夜の私は、大変に泥だらけになっていて金モールは一本も無く、人間的にも同様に単純に見えていました。その時の私は、新聞付き司祭を前にして陽気で、水も割らずに酒を飲んで特別休暇で罵り言葉を言うまでになる喜劇を演じている様にも思えました。私は彼に言いました、「あなたは神の名にかけて休暇中であることを宣誓している人々の立場にいますが、自殺させられなくてはならない人々の立場にもいるのです。それというのも司教が話している様に、私たちは死者たちでなければならなくなるからです」。この決まり文句は、私が〈神〉の使者を篩にかけた嘲笑の微かな観念を与えていますが、それは私が思い出にも残して置いたものです。これは悪趣味であっても確かなことでした。しかし、私たちが良い趣味と礼儀正しさによって、どんな恐怖へ行ったのかも大変良く理解していました。そして、もしもアカデミーの優雅さで激しく砕くので無かったなら、下位も上位も全ての自由が失われていることを私は今日でも思っています。泥や血に対しての唯一の源泉である自由な判断力は、社会に応じて没頭することではか自らを救済出来ません。かうして私は既に福音書を私の方法に適用していました。しかし、それは奇妙な方法です。左翼の理論家たちは、侯爵や耽美主義者たちがそれを愛していないのと同様に、愛していないことを私は認めました。私は何時も軍隊無しの将軍でいるのでしょうか。あり得ることです。私は最初に、そして二回目も更に激しく耕さなければならないと考えます。結局は優美な知識という根を切ることなのです。あらゆる危険を冒して切ることです。しかし、代数や文学の果実であるこの不条理な戦争に近づくのは如何なる危険なのでしょうか。フリレイの若い我が軍人たちは持ち堪えていました。これらの子供たちは心から笑っていました。私は誰を信じて、何が信じられるのか、もう一度自問します。私は死や苦痛によるこれらの困難な日々の中で、ふり返る度に見たものと別のものを恐れていた人間は一人も見ませんでした。そして、アレル自身は私が見た処では、勇気と友情に厚い男でしかありませんでした。それ故に立派で力強くて至る所で通用した貨幣の様な彼は、俄雨の下にいる様に元気一杯に体を激しく揺すり、決して文句を言うことも無く、説教することはありませんでした。彼は少し後になって私のために内密に私たち二人の間で、低く地面の方に注意深く私を見る二人の説教師が行う説教を見守っていました。別の日の昼間に彼は私に言いました、「そうではないが、私の金モールは何処にあるのか、私の権力は何処にあるのか、どうぞ教えて下さい。私は男です。そして男にとって正しいことは何でも私にとっても正しいのです。私たちが宿営している時、私の住まいは何処

でも構いません。皆が何時も良い住まいを取って置いてくれます。屢々ベッドも取って置いてくれます。もしもあなたがそこに私を見付けたとしても、その時は私を無視して下さい。家畜小屋でもどうにかあります。私は喜んでそこで眠ります」。それは本当でした。私は言葉を決して信じません。しかし動物の様に眠っているこの男を私は屢々見ましたし、彼は私以上の歩兵でした。大変に立派です。聖人たちは私には怖くありません。しかし歩兵を語るには、私は一番良い別の機会をもう一度持つことになりました。彼は私に言いました、「あなたがここで言うことは、私自身が行うことよりもそれだけ良く私は理解します。これらの不幸な男たちの真ん中が、あなたの男としての場所です。そして他の場所は全てがあなたに恥をかかせるに違いありません。しかしその時に、あなたがいなければならないに違いないのは、歩兵たちと一緒にです。もしもあなたが望めば、私と一緒にです。もしもあなたが望めば、明日も一緒にです」。私は考えたことや今でも考えていることを彼に言いましたが、それは一度で良く分かりもしないで決めた決心が、そこにあるということです。そして望むこととは、人が一度で望んだことであり、私が知ったのはそんなことです。しかしながら、私の勇気は相手のこの地獄の集まりの端に止まっていたのを私は十分に認識していました。事實は、最初の数ヶ月間は難所も無く用心することも無いが、私は命を落とすに違いないと思いました。しかしその後砲兵の手腕で、私が出発する前に見たり聞いたりすることを条件で、逃れられるという考えが大きくなりました。要するに勇気は、どんな武器もそうである様に戦争では消耗します。実行するための自由を守りながら、その時には又必然性に身を置きます。小説的な空想的な精神を快く思わないこれらの熟考によって私が理解したのは、トルストイの若き英雄です。それは馬を買うために後方へ送られて、決して運命に逆らわないニコラス・ロストウ(1)だと私は思います。

更に私は少し後になって三ヶ月間診療所にいた後で、足を負傷した人の収容所に三日間静養しました。そこでは無言の恐怖が支配していました。我々はヴェルダンへの道に全員いましたので、想像力が働くのでした。ところで私のベッドの隣には、誇り高く物静かな風采の司教がおりました。彼はモロッコ人の狙撃兵として回教徒となって装備を整えていました。彼の庇の無い帽子の上の三日月は冷やかしの美しい観察対象になりましたが、黒い瞳は覚悟に溢れていて恐らく絶望で一杯であり、どんな空想からも私を逸らせました。私は、彼が行ったことを知っていましたし、多分彼よりも良く知っていました。その無言の悲劇は最早感動させるだけでした。その人は少しは健康的な人物でした。私は彼の新しい服と新しい勇気に感嘆しましたが、彼は私に二週間後も止まっているのか尋ねました。多分、彼から私の無鉄砲な友人であるアレルのことを想定しながらも、私は彼に欺されました。それはアレル神父の定義だったのです。その定義とは「前線は最後の憲兵から始まる」。恐らく、この未知の言葉は最後の憲兵を乗り越えませんでした。しかし私が知る限り、足を負傷した人の診療所はその他の何処の場所よりも出発を決心することが難しいのです。つまり怪我が治っていても、各人が独りになって誰も残っておらず、毎朝無関心な点呼を聞かされて、友情から誰も助けてくれず、如何なる困難な行動も無いのです。モロッコ人の狙撃手の服を着たこの人物は、少なくとも彼が信じた取り消しのきかない運命と同時に、自分自身の意志によっても取り巻かれていたことを彼は知っていました。その魂の誇り高い部分が、偉大な権力を夢見ているにしろ、あらゆる人を軽蔑しているにしろ、永遠のものとして面目を施しているにしろ、単に死すべきものとして面目を施しているにしろ、まさに常に困難で危険な場所の方へ発射することに彼は傑出しています。最も控え目で最も高慢なものがその時は同

じ理性を見出すのであり、近づくにつれてそれらの理性が大変に弱いものに見えて震えるのです。その何ものかが、多くても五つか六つの文章を私に創らせる声となって響きました。修道女になったかの如く私には思われます。私は全体が美しいのを考慮します。でも、他にはどんな風にやるのでしょうか。普遍的な恐怖は、戦争の下らなさを説明しません。というのも全ての人々が我々の道徳家たちの中で、最も果敢な人が行くのと同じ位に遠くへ逃げ去るのを妨げることを、私はあなたに求めるからです。私とその動きを軽蔑したことは謝ります。平凡な当事者も同様に、まさに復讐しなければならないのです。（完）

（1）ニコラス・ロストウは、トルストイの小説『戦争と平和』の登場人物で、青年士官としてアウステルリッツに従軍し軟弱であったが、軍に馴染んで成長して行く。

執筆者のプロフィール（五十音順）

出雲 筑三（いずも つくぞう）

一九四四年六月、東京都世田谷区下北沢生まれ。千葉工業大学工業化学科卒。混迷と淘汰のたえない電子部品の金めっき加工を手掛けた四十五年を無遅刻無欠勤で通過した。芝中時代は実用自転車1000mタイムトライアルで東京都中学新記録で優勝、インターハイでは自転車ロードレースでチーム準優勝、立川競輪場での個人2000m速度競争において総理大臣杯で三位となった。趣味として歴史と城物語をこよなく信奉し、日本百名城に挑戦中である。仕事面では日本で最初の水質第一種公害防止管理者免許を取得、そのご東京都一級公害防止管理者、職業訓練指導員免許など金属表面処理技術者として現役で勤務している。三行詩集『走れ満月』（二〇一一年三月）・『波濤を越えて』（二〇一二年九月）・『五島海流』（二〇一七年五月）を出版。埼玉県所沢市在住四〇年になる。日本詩人クラブ会員。時調の会・世界詩人会議会員。

北岡 善寿（きたおか ぜんじゅ）

一九二六年三月十日生まれ、鳥取県出身。文化果つる所と言われたばかりか、県下の馬鹿の三大産地の一つという評判のあった農村に生まれ育ち、一九四三年に出来の悪い生徒が集まる地元の中学を出て上京したが、一九四五年三月現役兵として鳥取連隊に入隊。半年後敗戦で復員し再上京。酒ばかり飲んで無能なジレットにすぎなかった。大学のころは今は故人の北一平や東大生の本郷喬らと同人誌「彷徨」で一緒。一九七四年文芸同人誌「時間と空間」創立同人。二五号から六四号（終刊）まで編集担当。一九九四年「風狂の会」会員となり現在に至る。詩集『土俗詩集』（一九七八年）、『高麗』（一九八六年）、『樞』（一九九一年）、『痴人の寓話』（一九九四年）を出し、詩集以外のものとして随筆集『つれづれの記』（二〇〇三年）、『続・つれづれの記』（二〇〇九年）、『一読者の戯言』（二〇一四年）を出版。日本詩人クラブ永年会員。日本ペンクラブ会員。風狂の会主宰者。

高 裕香（こう ゆうか）

一九五八年二月二日生まれ、大阪市出身。幼い頃から、日曜日になると父親に大阪城公園に連れていってもらい公園中を駆けめぐる。菜の花畑やレンゲ畑で ちょうちょうやトンボを追いかけたり、おたまじゃくし、ザリガニを取って遊んでいた自然児。なんとなく父からルソー教育を受けていた。五歳からピアノを習う。大阪基督教学院の児童教育学科を卒業後小学校教員になる。現在、東京韓国学校で日本語の講師を務めている。日本語教育学会会員。ヤマハピアノPSTA指導者。「心のアルバム」・「虹の架け橋」・「赤い月」・「日韓文化交流合同詩集」などのアンソロジー詩集に参加。二〇〇七年度「民団文化賞」優秀賞受賞。二〇〇九年、二〇一一年度「民団文化賞」佳作賞受賞。日本詩人クラブ会友、時調の会・世界詩人会議会員。

神宮 清志（じんぐう きよし）

一九三七年一月九日、盧溝橋事件のあった年、徳富蘆花の住処の近く（東京府千歳村）で生まれ、幼年時代をそこで過ごした。二歳で父に死に別れ、敗戦前後の混乱の中、引っ越すこと十回あまり、小学校時代から働き、冬でも素足で過ごすという貧困の中で育った。大学卒業後サラリーマンとなって暮らしは安定し、三十歳代半ばに能面師に弟子入り、以後三人の師匠についた。個展四回、団体展出品多数、最近では創作面も作り、イエス、ジャンヌ・ダルク等も作成した。能面制作はほぼ毎日ながら、最近視力・体力の衰えもあり午前中のみ、午後は筋肉トレーニングとボールルームダンスに打ち込んでいる。いっぽう随筆同人誌「落」に四十年ほど在籍して、二百二十編の随筆を発表してきた。手作業をしていると、思いと考えが限りなく浮かんできて、書かずにいられない。いわば物狂おしいため息のようなものか。

高村 昌憲（たかむら まさのり）

一九五〇年三月、静岡県浜松市生まれ。明治大学文学部（仏文専攻）卒業。詩集は『螺旋』（一九七七年）、『六つの文字』（二〇〇四年）、『七〇年代の雨』（二〇一〇年）。評論集『現代詩再考』（A&E・二〇〇四年）。翻訳は『アランの「エチュード」』（創新社・一九八四年）、アラン『初期プロポ集』（土曜美術社出版販売・二〇〇五年）、ジャン・ヴィアル『教育の歴史』（文庫クセジュ971・白水社・二〇〇七年）。共同編纂『齋藤志詩全集』（土曜美術社出版販売・二〇〇七年）。一九九八年に「現代詩と社会性—アラン再考—」が詩人会議新人賞（評論部門）。二〇一二年から電子書籍（パブー）に、随想集『アランと共に』及びアラン作品の翻訳『一ノルマンディー人のプロポ』『神々』『わが思索のあと』『思想と年齢』『ガブリエル詩集』などを登録中。日本詩人クラブ会員。

長尾 雅樹（ながお まさき）

一九四五年生まれ 岩手県出身

詩と思想研究会所属

既刊詩集

『悲傷』『山河慟哭』『長尾雅之詩集』

日本詩人クラブ理事長

なべくら ますみ

一九三九年 東京世田谷生 日本大学文理学部国文学科卒業

日本現代詩人会 日本詩人クラブ 時調の会 各会員

櫛自由詩の会同人

詩集『同じ空』『城の川』『色分け』『人よ 人』『川沿いの道』『なべくらますみ詩集』『大きなつづら』

エッセー集『コリア スケッチラリー』（共著）

訳詩集『花たちは星を仰ぎながら生きる』（韓国・呉世榮）他

原 詩夏至（はらしげし）

詩人・歌人・俳人・小説家。一九六四年生まれ。東京都中野区在住。著書に詩集『波平』『現代の風刺二五人詩集』（共著）、句集『マルガリータ』『火の蛇』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞俳句部門努力賞）、歌集『レトロポリス』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞短歌部門大賞）『ワルキューレ』等。小説集『永遠の時間、地上の時間』。

日本詩人クラブ・日本詩歌句協会各理事。

日本現代詩人会・日本短歌協会・現代俳句協会各会員。

三浦 逸雄（みうら かつお）

一九四五年四月二日 札幌郡琴似町で生まれる。

一九六七年上京し 高円寺フォルム美術研究所、新宿美術研究所に通う。

一九七〇年スペインに渡り、マドリードの美術サークルCircro de bellas artesで人体デッサンをかさねる。帰国前の一年は、ベラスケス、グレコ、ゴヤ、ムリーリョを見るために、プラド美術館へ足繁く通う。一九八三年に帰国。

一九七五年以降、現代画廊（東京・銀座）、東邦画廊（東京・京橋）他で作品を発表する。

（以上）

読者からのコメント（2017年8月号）

アラン『大戦の思い出』（三）第二章：英雄に見えるB大尉のことから、外見とは違う人間像を知りました。権力を持つもの。それに加担しないもの、権力を望まないもの、不幸な悲しい戦争にあっても、純粋な勇者のいることなど貴重な体験を知りました。

一杯のコーヒーから：水商売の世界の、貴重な経験を教えていただきました。

三浦逸雄の世界（二十一）：まっすぐ静かに立っている姿がいいと思います。

残相：国や宗教によって弔いの仕方が違うのですね。鳥葬を見ると、土に還れず風化を待っている亡骸が虚しく思います。日本に生まれてよかったと思います。

ユカタン半島：滅びた民族の遺した、巨大な神殿の廃墟に無常の歴史があったのですね。人が夢を見ると儂いという字になるんですね～。

歴史入門：歴史の真実を知るには、心して先人の足跡を探らねばと知りました。

空蝉：空蝉をよく見かけます。そばで声を限りに鳴いていて。そこから、源氏物語に入っていくところに感動しました。美しいですね。

真相：ゴキブリを叩いても、一度でしとめられません。逃げられることもしばしばあります。そのことから、生きる屍や救世主に思いを馳せられて感じ入りました。にんげんもゴキブリみたいに強く生きられたらと思いますが・・・

おみなえしの夏：旅姿三人男、懐かしいですね。三連に共感しました。

栄光を知る人へ：栄光を知る人は、栄光も名誉も捨て他に譲って、命を充実させるほんとうの楽しみ方を知っているのですね。ご立派ですね。柚子が譲に通じるとは知りませんでした。

（以上）

同人誌 風狂 (ふうきょう)

第38号 (2017年 9月登録)

<http://p.booklog.jp/book/117143>

編集：風狂の会 (担当：高村 昌憲)

編集担当者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/117143>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト